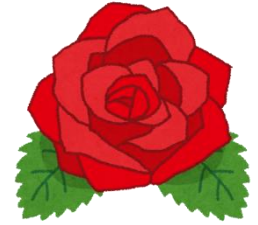


コラム  **バラの季節**

5月になるとあちらこちらの西洋庭園でバラの花が咲き始めます。バラの花にまつわる数々の逸話がヨーロッパを中心に広まっています。今回は人とバラをめぐる話をまとめてみました。<sup>1) 2)</sup>



○人とバラの係わり

人とバラの係わりは最古の文明といわれるメソポタミア文明（紀元前 3000 年頃）まで遡ることができます。当時の墓地や神殿からバラの花束が遺物として発見されています。地中海のクレタ島にあるクノッソス神殿に残されたフレスコ画（紀元前 2000 年頃）にはバラが描かれています。科学的な視点から見ると葉の付き方、花弁の枚数（本来 6 枚が奇形の可能性か 5 枚しかない）などバラであると判断するのが難しいと言われていたのですが、最古のバラの絵画といわれています。ギリシャ時代（紀元前 1200 年頃）になると、バラは特にその香りを中心に、体に塗る香油として広く使われようになります。そしてローマ時代（紀元 0 年頃）になるとバラに対する関心はますます高まり、熱狂的とも言えるものとなりました。複数の産地から大量のバラがローマに集められ、歴代のローマ皇帝はバラの花を大量に消費しました。5 代皇帝ネロは、室内だけでなく歩く道にバラを撒くなどバラの花で身の回りを埋め尽くしました。また、真偽は定かではありませんが「ローマ皇帝群像」によれば、23 代皇帝ヘリオバルガスは、宴会の会場で天井からバラの花を大量に降らせて来客を生き埋めにするなど狂喜とも言えるバラのブームとなりました。

ローマ帝国の衰退とともに中世ではバラは贅沢を表すものとされ、禁欲的なキリスト教の教えから神への捧げもののシンボルとしてバラの栽培が細々と行われる時代になりました。十字軍の遠征（1100～1200 年頃）が行われると、東方の品種がフランスに渡り、葉として栽培も行われました。ルネサンス（1300 年頃）を迎えるとギリシャ、ローマ時代にバラの香りを楽しんだ当時の文化とともにバラの香りを楽しむ習慣が復活するようになり、フランスのプロバンス地方でもバラの栽培が行われるようになりました。このプロバンス出身のイギリス王妃が紋章として白バラを使い、イギリス王家の紋章としてもバラが使われるようにもなります。イギリス王位の継承をめぐる内戦であるバラ戦争（1455～1487）には、ヨーク家の白バラとランカスター家の赤バラが紋章として使われました。両家の和解により、テューダー朝が始まりましたが、紋章は白と赤のバラを組み合わせています。



テューダー・ローズ

当時（15～17 世紀）までのヨーロッパで栽培されていたバラは、春だけに咲く一季咲きのバラです。フランスの王家でもバラの栽培は行われており、王妃マリーアントワネットもバラを大切にしていました。「ベルサイユのばら」でも有名ですが、フランス革命（1789 年）という動乱の時代を迎えます。その中で、ヨーロッパだけでなく世界各地からバラを収集してバラ園を作ったのは、現在は「バラの母」とも言われるフランス皇帝ナポレオン（1804 年）の妃であるジョセフィーヌです。彼女の造ったバラ園では、自然交配でさまざまな種類のバラの花が作り出されていました。

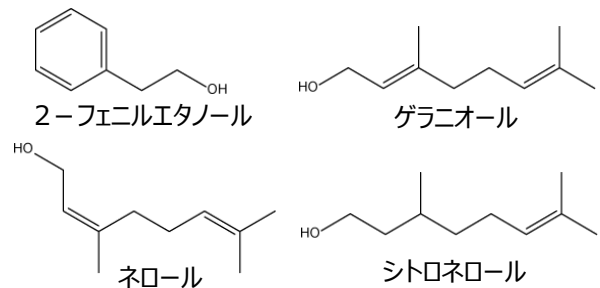
この頃の、ヨーロッパ及び周辺で自生していたバラとは、異なる品種である中国原産の四季咲き

のバラが持ち込まれます。そして、1867 年より前に栽培されていた品種をオールドローズと呼んで分けるほどの、大きな変革をもたらした画期的なバラの品種が、人工交配により創り出されました。フランス人の育種家であるギョーによる「ラ・フランス」で、モダンローズの第 1 号です。気温や栽培方法を工夫すれば、冬でも花を咲かせることが可能となりました。これを契機に、バラの品種改良がヨーロッパ各地で競うように始まり、現代に至るまで全世界で育種家によるバラ品種改良が行われています。花の色、大きさ、はなびらの形などの美しさを競い合っています。

日本では 1868 年に明治維新を迎えており、西洋文化の流入とともに国内にバラが持ち込まれています。財閥経営者の邸宅の西洋庭園にもバラの花が植えられることになりました。また、日本のバラ園の特長として、鉄道会社が沿線にバラを積極的に植えながらバラ園を運営しており、大手鉄道会社がバラの品種改良も含めて積極的に関わっています。

### ○バラの香り

バラの花弁（はなびら）には精油成分が含まれています。バラ水やバラ油を採るために地中海沿岸地方や中近東では現在でも大量のバラが栽培をされています。バラの香料の主成分は、右に示すような、2-フェニルエタノール、ゲラニオール、ネロール、シトロネロールなどの化学物質が主成分です。製法にもよりますが、2~4t の花弁から 1kg のバラ油が得られると言われています。



バラの香りに関する研究はこれまでに数多くなされてきましたが、本物のバラの香りには到達することが難しいとされてきました。近年になり、微量成分を調合することで安価に天然のバラの香りを再現することが可能となり、バラの香りを持つ製品が増えつつあります。

#### 【参考にした情報】

- 1) バラの世界 大場秀章：講談社学術文庫
- 2) バラの歴史：公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会

<https://www.jataff.or.jp/bara/rekisi.htm>